

フランスのリアル東セクターにおける 精神医療へのアートの導入について

三脇 康生

△はじめに▽

単純に、地図を見てみよう。リアル^①の立地を見ると、もはやパリよりもロンドンに近いことがわかる。さらに、筆者がフランスの南部出身のある研究者に聞いても、仕事があれば、リアルは、特別に行くような場所でもないというのだ。このように、パリから南フランスに行くのとは逆方向に位置する場所ゆえにこそ、フランスでは通例の、セクター制度、つまり病院を確保し、その周りに病院外施設を充実させるという動きとは異なる動きをしたのだとも言えるだろう。つまり筆者には、リアルからは、パリへの距離があると言うしかない気がする。あるいは、リアルが国境の町であることも理由として考えられる。

リアル東セクターにおいて、病院への入院患者がほとんどいなくなつたと私が聞いたのは、二年前、イタリアのトリエステ

を訪問した時だった。実際に訪問した時の、報告は昨年に済ませている^②。そのようなリアル東セクターでどのようにして病院がなくなつたのかと問われれば、二つの大きな理由があると考えられる。

一、今回、二〇一六年十一月一日 甲南大学、人間科学研究所にて、来日講演をした、ジャンリュック・ローラン氏が代表を務めていたリアル東セクター（リアルの中の一つの（成人の）精神医療セクター^③である）ヘトリエステからフランコ・バザーリア^④を呼んだこと。一九七八年に、イタリアの精神病院の全廃運動の先頭に立ったバザーリアとその改革チームを、イタリアのトリエステからリアル東セクターへ呼んだこと。

二、リアル^①の産業自体が停滞したことから、アートを街づくりの根底に据えたこと。これは結果的には、二〇〇四年の欧州文化首都に任命されたことに結実している。それで、病院を解体するに当たり、アートの活動を容易に導入できたこと。これは、精神医療の常識を常に現象学的にカッコに括り、あるいは精神的分析的に精神医療システムへの過剰な転移を分析できることを意味するだろうこと。

このような、情報を手にしただけであるために、詳細を聞き取るためにも、リアル東セクターの改革を担ってきたジャンリュック

ク・ローラン氏と二〇一〇年からトリエステからリールへ移動して精神科医を務めるマッシモ・マッシーリ氏を招聘し、二〇一六年一月一日に、公開研究会を甲南大学、人間科学研究所で開催した⁽⁴⁾。

上記二について詳しく掘下げるのが今回の招聘の理由であるが、その前提にある一の点について明らかにしたことを、まず述べる。

ハバザーリア・カステル・フーコー

ローラン氏が、大きな病院の閉鎖病棟で働いていた精神科医として、参照したのは、トリエステで精神科病院の開放を決定した、バザーリアであった。呼ぶべきなのは、ラボルド病院で、医者でも心理士でもなく無資格で働き、哲学的な著作を書き国際的なエコロジ運動を起こそうとしていたフェリックス・ガタリ（精神分析は受けていた）でも、反精神医学を推奨したディビッド・クーバーでもなかったというローラン氏の現実的な事情がある。病院を閉じてでも社会に蔓延している疎外は治癒しない、という急進的な主張にバザーリアは反対していたのであるが、ローラン氏にはそれが信頼できることだったのだろう⁽⁵⁾。実際に、病院を開放する術を、バザーリア以外は知らないからである。このような大変にプラグマテックな要請に基づいて、

ローラン氏は動いていたと言える。

さらに、ローラン氏には、多分に、ミッシェル・フーコー（Michel Foucault）の『狂気の歴史』へのシンパシーを感じているふしが見える。これは、今まで筆者が出会ったフランスの精神科医には、あまり感じられない感覚である。存外、ミッシェル・フーコーの『狂気の歴史』は、フランスの精神科医からは無視されており、嫌われている印象が著者にはあった。この違いは、ローラン氏がいわゆる六八年世代であることも大きな要因である気もするが、どうしても精神病院を解体するしかないことを基本の方針として打ち出した者ならではの特徴なのかもしれない。解体する時の、掛け声として、ミッシェル・フーコーの著作『狂気の歴史』が使われている節がある。しかし、それを単なる知的ファクションと言うことはできないだろう。なぜならば、リール東セクターは社会学者のロベール・カステルを頻繁に呼んだからである。カステルは、一九六八年までリール大学で教えていたということも大きな理由であろう。また、バザーリアがカステルの著作をイタリアで紹介していたことも、リール東セクターにカステルを呼び続ける意味があったと思われる。また、カステルは、フーコーと著作を共著で出しているように、フーコーとの関わりが深い。このようにして、リールにおいて、バザーリア、カステル、フーコーの三つの輪が繋がっていると言える⁽⁶⁾。

フーコーは『狂気の歴史』第一章、第二章の中で、以下の点をまず明確にしていた。中世には、狂気は悪徳の階層秩序に組み入れられていた。思慮と愚痴（狂気）が対立項としてあげられていた。やがて、狂気が慎ましい地位から第一位の地位を占めるようになる。それでも、狂気が「大いなる閉じ込め」が行われることはなく、都市から排除されて、さまよう存在であった。十字軍が中止になり、十字軍の遠征先で罹患した病気がヨーロッパで流行することはなくなったが、ヨーロッパ内で宗教戦争が起り、ペストが流行することになる。狂気は、世界を引裂き、幻想的な威力を発揮する隠れた力ではなくなる。やがて貧民の救済の場所に、狂気が「大いなる閉じ込め」を受けていくようになる。背景には、狂気が理性と相關的な形式になったことがある。狂気は、理性の諸形態そのものの一つとなるのである。深淵のごとき狂気も、ついには、取るに足らぬものとなる。底知れぬ狂気は、人間の脆い理性によってのみそうであるからである。ここで人間がまずは前提とされることになる。精神医学のシステムが、この延長線上に発生してくる。このことが、施設においても、エピソードにおいて、狂気の「大いなる閉じ込め」を開始することにつながる。

フーコーが書いたように狂気は、世界を引裂き、幻想的な威力を発揮する隠れた力であったのだから、そのような狂気へと狂気を復帰させることをリール東セクターが目指しているとま

では言えないにしても、少なくともヨーロッパの人間を前提にした線の延長線に乗ることに違和感を表明したいという気持ちがある。がローラン氏にはあると考えられる。

芸術活動を精神医療にリールが導入するのは、単に精神医療の常識をアートの常識で、相対化することだけにはあるまい。狂気と文学活動には（あるいは少なくとも芸術を巡る言葉には）かくも風変わりな近親関係が認知できるとして、以下のようなことをフーコーは書いた。「（略）言語活動として発見された狂気は、一つの作品の（もしくは才能や幸運によって作品になりえたかもしれない何ものかの）誕生を明らかにもしないし物語もしない。それは（略）作品「『営み』」が不在であることをやめない場所を、そこには作品「『営み』」がけつして存在していなかったのであるから人々にはけつして見出せないであろう場所を指示するのである」⁷⁾。しかるに現在「疑い得ない点であるが、精神病はますます共に制御される技術的空間のなかに入ろうとしている。たとえば病院では薬理学がすでに、凶暴患者病室を大きい微温的な観賞用養魚槽に変貌させた。だがこうした変貌の下では、しかもそれとは無関係（すくなくとも目下のわれわれの立場では）に見えるいくつかの理由によって、「近親関係の」解消が生まれつつある。つまり、狂気と精神病は同じ人間学的統一性への帰属関係を絶つのである。その統一性じたいは、一時的な公準たる人間とともに消滅する。病気の

情緒的なハレーションである狂気は消えることをやめない。だが、病理学的なるものから離れて、言語のかたわらで、それがまだ何も述べずに自分を折りまげる場所で、一つの経験が生まれつつあるのであって、われわれは思考が関与するのはその経験である。すでに可視的な、だが絶対的にうつろな、その切迫さはまだ命名されることができない」⁽⁸⁾。

精神病と狂気が依拠する人間という統一性が崩れた時、フーコーが実に素直に書いている「その切迫」を治療者側が自らのこととして考えるようにしたいというローラン氏の意向があるように思える。リール東セクターでは、市民精神医学が誕生したという議論が今回なされたが、フーコーが指摘するような「人間」が今度は「市民」になったという時、リール東セクターが何をしているのかは更に考察を必要としている。「市民」は「人間」から外れたもののなか、それとも「人間」のさらなる「人間」化を推し進めるもののなか、それは極めて慎重に考える必要がある。「その切迫」はかえって消されてしまわないのか見守りたい。

講演会の質疑の時に、川田都樹子氏から出た質問、つまり「アートが精神医療の手伝いとしているというよりも、アートが精神医療に救われていると言えないか」という質問には、そうだと見えるという返答をローラン氏はした。「精神医療は、今や患者でなく、マイノリティ、弱者への対応をしていると言

えるのだから、公共活動へのアクセスを増やすことが、アートにより可能なら、アートは重要な活動になる」との返答であった。公共圏へのアクセスが「人間」という統一性をさらににくくするものなのか。国とそれぞれの地域の状況も大きく影響すると考えられるので、細かに深く考察する必要も出てくる。日本でも、まずそれぞれの地域の情勢の分析を行う必要がある。「人間」への統制を強めることは、文化的側面でも余計な監視と緊張を生みもするからである。そのような事例が日本でも増えていると予想できるからである。

ハリール二〇〇四V

次に、冒頭の二の点について、明らかにになったことは、「八〇年から九〇年にかけて起きた、硬い精神医学を文化によって溶かす試みは、当時のジャック・ラング (Jack Lang) 文化大臣が行った飛躍をさらに発展させただけのものなのです」と、講演会でローラン氏が言うように、ラング文化大臣の政策がリール東セクターでも大きな影響を与えたということである。

さらに、リールに特異な文化事情がある。それを以下、フランソワ・ラリーの論文に基づいて記す⁽⁹⁾。一九七〇年代、ピエール・モーロワ市長が、工員の町、つまらない町というイメージを変革するために、文化を用いて数々の文化政策を実施した。

八〇年代には、一時的に工業で栄えて、あつという間に衰退した悲しい雰囲気のある町というものだった。冷たく気候の良くない町において、変革が始まった。リールが二〇〇四年の欧州文化首都に任命されたことは、大きな変革となった。開催が決定されたのは、一九九八年のことであった。ハイレベルな国際プロジェクトから地元密着のお祭りのイベントに至るまで、あらゆるレベルで地域開発の原動力となった。

さらに、筆者はリールの特異性についてメセナの専門家である、加藤種男氏に質問したことがある。加藤氏からは、他の都市なら、公が統括するところを、若者が運営するNPOに統括を任せるという英断を下したのだと返答をいただいた¹⁰。

前出のフランソワ・ラルーの論文によれば、「リール二〇〇四」で総コーディネーターを務めたローレン・ドレアノは、〇五年二月、文化担当副局長に任命された」とあるので、ドレアノが、加藤氏が言うところのNPOの運営者であり、そのドレアノが局長に抜擢されたことが推測できる。フランソワ・ラルーの論文に戻ると、そのドレアノは、リール二〇〇四が終了した後、「リール三〇〇〇」という大規模なプロジェクトに着手した。リール市は、予算の一二%を文化政策に使っている。二〇〇一年から文化担当助役カテリーヌ・キュランの強力なバックアップにより進められてきた文化政策に、専門家と地域住民に対してダイナミズムが生まれて、地域の間関係が大きく変わっ

た。「リール二〇〇四」が終了した後の「リール三〇〇〇」により、かつてない規模でのイベントが行われて、芸術、文化、市民活動、観光の分野の担い手の能力が強化され続けている。

加藤氏に筆者が質問した際、文化による地域起しをするためには、客を呼ぶよりも、地域を巻き込むことに成功の鍵があると言明された。順番を逆にしてはならないというのが、加藤氏の意見であり、リールはまさにその特異な例だと筆者には、考えられた。

精神医学と直接的に関係しそうな施設名としては、「リール二〇〇四」において、文化センターとして創設された一二か所の「メゾン・フォリ」（狂気の館）というものがあることだろう。現在も一二の施設のネットワークとして運営が継続している。

ハリール東セクターの新たな動き▽

今回、来日を要請し、来日して講演した二人の講演者は、WHO（世界保健機構）と連携しているリール精神保健の研究、人材育成センター（CCOM）に所属している。このセンターの来歴を紹介したい。以下は、『ピアヘルパーの実験、静かではない革命』という本に掲載されたローラン氏の論文「実験の構築」を要約して用いる¹¹。

WHOが二〇〇〇年から二〇一〇年まで、診断と治療から、方向を変え、単に病気と障害がないのではなく、個人の身体と精神の幸福を目指し、精神保健と最小限のサバイブスを目指した。リカバリー (recovery) 、エンパワメント (empowerment)、市民権の三つ組を打ち立てた政策を打ち上げた。二〇〇〇年以来、反スティグマ運動もフランスで盛んになった。この時に、精神医学のユーザーと介護者が公共の政治決定に参画することになった。社会への統合によって、ユーザーは精神保健サービスから自立する、それがヨーロッパ市民の (二〇〇五—二〇一〇年の) 中心課題となった。EUとWHOは協力して、二〇〇八年に、「ユーザーと介護を行う人をエンパワーする」という集団をたちあげた。二〇一三—二〇二〇年には、WHOは、精神保健プロモーションを行い、その一環で、二〇一四年にリールにWHO協力機関CCOMが作られることになった。

自殺研究グループと精神疫学研究グループがリールで二〇〇六年に精神保健におけるレジリエンスをめぐる学会を開き、精神分析家、精神科医に混じり、ケベックのピアサポーターが参画した。リール首都圏の精神保健機構 (EPSM (L'Établissement Public de Santé Mentale)) に手助けされ、CCOMは、レジリエンス概念に対する考察を深く行うことができた。CCOMはWHOから指定されたセンターを務めているが、それは四年ごとにWHOから指定されるものである。指定のためには、

多数の研究と育成のプログラムを行うことが基盤となっている。市民精神医学は、リールだけでなく、フランスの、そして全世界で、一九七〇年代に起きた理論と実践の検証の果実であり、帰結である。Patrick Le Cardinal 医師が主導して、自分の意思とユーザーの意思に基づいてピアサポーターに関する国家教育プログラムを作らせることになった。CCOMSは、市民と精神医療ユーザーの精神保健活動への参加、当事者を統合する地域精神医療サービスの促進を盛んに行なっている。我々は、フランスで最初のパイロットプログラムとして、ピアサポーターを育成し精神保健施設に雇えるように試みた。三〇人の障害者が、八週間の授業と三六回の研修を精神医療の施設で行い、パリ第八大学から、認定を受けた。二〇一一年から、今回、ともに来日をしているマッシモ・マッシツリ医師がこのプログラムの実践者となっている。実際に、三〇人のピアサポーターが治療チームに入り、自らの養成を継続しており、ピアサポーターの実践報告集会にも集まっている。フランスの患者会 (Enapsy)、パリ第八大学、二〇〇五年二月にできた (社会参加や就労支援などを行なう) 障害者法に基づいたオートノミーのための金融機関、あるいはパリとリールとマルセイユ地域の保健機関、それらの地域の精神医療セクターでボランティア参加したセクターと連携しながら行われている。二〇一一年までは、患者会 (Enapsy) はこのような動きには反対していた。

患者家族会（Unalam）も賛成はしていなかったが、ニースとマルセイユで賛成されはじめた。リカバリーというアングロサクソンの概念は、未だフランスには根付いていない。以上は、歩みを始めた過程にまだまだある。

△終わりに▽

リール東セクターはリール市の精神医療セクターの中でも、特殊なセクターである。リール市の他のセクターでは、同じようなことは起きていない。しかし、いずれにしろ、地方都市、リールに関してはイギリスとの距離の近さが感じられる。一九七〇年代のイタリアの動きがもとと根付いていたリール東セクターではアングロサクサン系の発想も嫌わず用いて、思い切った脱施設化が起きたことがわかる。しかも、リール市全体に文化首都になるという意気込みがあり、これが精神医療改革を行うにふさわしい、基盤を作りだしていたことも予想できる。

だが、繰り返しになるが、リール市全体で似たようなことが起きたのではない。リール東セクターでは、トリエステのつながり、社会学者のカステルとのつながり、アーティストとのつながり、政治家との連携など、様々な試みの継続を切らさなかったことが特異な脱施設化を生み出したとも言えるだろう。ことは簡単ではなかったはずである。

この意味で、一旦持ち上げてはすぐに価値下げをする日本社会での事例を探すのは大変に難しいが、失敗した事例から少し考察してみたい。二〇一六年二月九日神戸新聞のインターネッ ト上の記事には、河尻悟の署名入りで、以下のような記事があった¹²。

「白髪一雄氏作品 加西市、美術館構想頓挫で競売へ

兵庫県加西市は九日、世界的に著名な尼崎市出身の抽象画家白髪一雄氏（一九二四～二〇〇八年）の抽象画「タジカラ男（お）」（縦一一四センチ、横八八センチ）を海外の競売にかけ方針を明らかにした。八九年に一三〇万円で本人から購入したが、落札価格は二千万円程度と見積もられている。

白髪氏は戦後の前衛美術をけん引。天井からつるすロープにつかまって足で絵を描く独自の手法で国際的に高い評価を得ている。

同市はかつて美術館併設の考古資料館建設構想を掲げ、八九年に「タジカラ男」を含む美術品二五点を総額三三三〇万円で購入。構想が宙に浮いたため、「タジカラ男」は庁舎内に一時掲げた後、倉庫に保管した。

今夏に保存状況を確認すると、一部作品で劣化が進んでいたため売却を検討し、絵画修復家で吉備国際大（岡山県）の大原秀行教授に修復鑑定を依頼。「タジカラ男」はほぼ問題が無い状態で「品が良く美しい作品」と高く評価された。

市は国際競売会社「サザビーズ」日本支社に相談し、来年四月に香港である競売に出す予定。同社が落札価格を見積もった。市の担当者は「作品の価値を理解し、より良い評価をしてもらえる人に渡ればうれしい」と話している。」

脚で絵を描いた白髪二雄の「脚力」に、もしも着目して、「脚力博物館」のようなものを、美術、医学、保健、福祉、歴史、考古学から成り立たせれば、複合的な施設ができて、地域の活性化もできたかもしれない。市民の健康にも役立つであろう。複合的な観点を維持できて、なおかつ有益な機能を果たせるなら、それは進むべき道の一つになるうとも考えられる。ただ、考えるべきは、以下の点である。美術、医学、保健、福祉、歴史、考古学をコンテンツとし、そのプラットフォームを造るというようなカタカナで語ること、各分野（コンテンツ）の微細な政治性が剥奪されてしまう危険性があることである。カタカナを用いる際の不必要な急き立てを真に受け、不用意に急ぐのはやめなければならない。むしろ、各分野での考察を粘り、かつ必要なつながりを（ということは現在では何でもかんでも繋げている現状がある）かろうじて作ることが重要である。だから、ここは繋がらないという意志が必要である。アンドリュ・カルプが書いた『ダーク・ドウルズ』をこの意味で熟読する必要がある⁽¹³⁾。繋がりがすぎていると感じられるかどうか、それが新自由主義との闘いも可能にする。しかし、繋がりがすぎを

過剰に意識する時、繋がりのフォビアを持つことになる。これも病理である。加西市では、このような意味で、「脚力」というプラットフォームが、結果としてはあってもよかったかもしれない。

このように、カタカナを使い不用意に何かを繋げてしまうこと、そして繋がっても何も粘らないこと、このことが日本で何度でも考え直される課題である。そのことを伴って初めて、リール東セクターの苦勞と持続性を少しは理解することもできる。そして、リール東セクターでも、そしてフランス全土でも、リカバリー (recovery) という英語の福祉用語が流通することが、そう容易でないこと、このことを落着いて考えていきたい。その遅さが単に悪いことなのかどうか、慎重に考えるべきである。カタカナにすることで、日本では何が起きるのか、慎重に考えたい。当然、アートというカタカナを用いる時も同様の努力が要る。ちなみに、バザリアがinstitutionを批判的に思考する際に頼りにしたアーヴィング・ゴッフマンの『ステイグマの社会学』（石黒毅訳）を読むと、プラットフォームは基本綱領と訳されている。基本綱領と具体的処置を対比させ、さらに自己に関する適切な態度をステイグマが決定してくるとしている。このことを無視したカタカナは危険である。

注記

本論文はJSPS科学研究費助成事業（課題番号 25284046）「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」（代表：川田都樹子）及び（課題番号16K02126）「アートがつくる新たな支援者関係、その実証的研究」（代表：三脇康生）の成果物である。

註

- (1) 三脇康生：『フランスのルールがイタリアのトリエステから学んだ「アートセラピー」でもオールブリュトでもないもの』—それをもどのように日本に活かすか—『心の危機と臨床の知』一七号 五一—六〇頁 甲南大学人間科学研究所 二〇一六年二月二九日
- (2) フランコ・バザーリアはヴェネチア生まれの精神科医。イタリアの公立精神科病院の閉鎖を実現する運動を妻のフランカ・バザーリアや多くの医師や役人や人文系の学者と起こした。またイタリアを超えて、国際的な動きを起こした。バザーリアについては、ミケーレザ・ネッティ・フランシスコ・パルミジャーニ著 鈴木鉄忠＋大内紀彦訳：『精神病院のない社会をめざして バザーリア伝』岩波書店、二〇一六年、そして、松嶋健著：『ブシコナウティカ』世界思想社、二〇一四年を参照のこと。
- (3) 人口六万七千人あたりのキャチメンエリアを意味するが、同時に、一つの病院と、地域での支援施設を配備するシステムも意味する。いずれにしろ、病院を中心とした医療福祉システムであることが

重要である。在院日数などは、日本と比べて著しく少ない。しかし、病院を中心に行っていることに、今回の講演会では議論がなされることになった。セクター制度について詳しくは、多賀茂・三脇康生編著『医療環境を変える—制度を使った精神療法の思想と実践—』京大学術出版会を参照のこと。

- (4) 本事業はJSPS科学研究費助成事業（課題番号 25284046）「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」（代表：川田都樹子）の助成を受けた。
- (5) ミケーレザ・ネッティ・フランシスコ・パルミジャーニ著 鈴木鉄忠＋大内紀彦訳『精神病院のない社会をめざして バザーリア伝』一五三頁・岩波書店、二〇一六年には、バザーリア（病院を解体する）とフランスのアウトノミア運動（病院を潰しても、社会の疎外はなくなる）、もつと過激な革命的な脱疎外化が必要である）の差が描かれている。この際、後者にガタリが参加していたことを前提に書かれているが、詳細は慎重に調べる必要がある。さらに同書一六六頁のガタリの紹介で、精神科医と記されているが、これは今まで日本で続く、悲しい誤解である。何度も繰り返される間違いは、知的怠慢としか言いようがない。ガタリは、何の資格も持っていない。しかし、精神分析を受け、ラボルド病院で運営に当たっていたことは事実である。だからこそ揺れたのである。ガタリの良い意味でも、悪い意味でも、抱えていた揺れ（例えば、実存と実在の間の揺れ）については、上野俊哉著『四つのエコロジー：フェリックス・ガタリの思考』河出書房新

社 二〇一六年を参照のこと。哲学者で言えば、ジル・ドゥルーズとアントニオ・ネグリの間でのガタリの揺れとも言える。

- (6) 同上書、二〇八頁には、カステルの『精神分析主義』という本がイタリア語訳された時に、バザールとその妻が共同で書いた序文が掲載されていると示されている。またフーコー編著『ビエール・リヴィエールの犯罪』（ビエール・リヴィエール——殺人・狂気・エクリチュール ミシエル・フーコー…編著 慎改康之＋柵瀬宏平＋千條真知子＋八幡恵一…訳 河出文庫 二〇一〇年には、『医師と判事』というロベール・カステルの文書が掲載されている。

- (7) ミッシェル・フーコー著 田村俣訳『狂気の歴史——古典主義時代における』新潮社、一九七五年 五八六頁

- (8) 同上 五八七頁 訳語を変更した。

- (9) フロランス・ラリー 「欧州文化首都リール二〇〇四」で得た市民の自信」三〇―三三頁 をちこち 二〇号 国際交流基金 二〇〇七年二月一日

- (10) Jean-Luc Roelandt: Construction de l'expérimentation in Expérimentation des médiateurs de santé-pairs; une révolution intranquille sous la direction de Jean-Luc Roelandt et Bérénice Standel. Doins edition. 2016

- (11) ハナスバ 二〇一六年六月三日（金）一九：〇〇―二〇：三〇 福井北ノ庄クラシックス（福井市中央一―二―三六 柴田神社小路）の際に質問した。

- (12) <http://www.kobe-np.co.jp/news/bunka/201612/0009738312.shtml>

- (13) アンドリュ・カルプ著 大山載吉訳：『ダーク・ドウルーズ』河出書房新社 二〇一六年

（みわき・やすお／精神医学）